



TITLE:

美保關町の研究

AUTHOR(S):

西龜, 正夫

---

CITATION:

西龜, 正夫. 美保關町の研究. 地球 1935, 24(1): 58-65

ISSUE DATE:

1935-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184440>

RIGHT:

## 美保關町の研究

西 龜 正 夫

### は し が き

島根半島の東端にある美保關は、古くは交通上の要點として繁盛を極めた港町であるが、今は單なる漁港であり、町の一部は門前町の形を呈してゐる。と或地理書に書いてある。交通機關の變遷が聚落の興亡盛衰に關係することは、あまり珍らしい例でもないが、この美保關が可成り名高い土地となつてゐる點から考へて、現在では果して如何なる生態を有する聚落であらうかと、ふと興味を感じたので、今春の少閑を利用してこの地を訪ふた。その結果がこの小文である。

大天橋を汽車で走つて、境の驛に下車したのが雨の夕暮であつた。今宵こゝに泊つて、明朝

美保關に渡らうと、旅館の物色をしてゐたら、驛の賣店の主人公は、泊るなら美保まで行つてお泊りになつては、とすゝめて呉れた。併し境の町も序に瞥見したかつたので、その説には従はず、翌朝美保に渡つたのであるが、あとで話を聞くと美保は晝見るよりも夜泊る所に趣味があるのだといふ。それは昔の港町の名残を止めてゐるからであらう。

二三時間の間ではあつたが、小さい町のことであるから、見るだけは見、調べるだけは調べ終つた。たゞ巡查駐在所に材料が無かつたので結局松江市に廻つてそこの警察を訪ねなくてはならなかつたけれども

### 町の形態

行政上の美保關町は島根半島の東の尖端部を占めて居て、主聚落たる美保關港の外に、海崎・長濱・輕尾・雲津などの小聚落が、各二三軒を距てゝ存在する。こゝに記さうとするのは主としてその主聚落についてであるが、統計の數字には行政上の全町をあらはすものもあるから一言斷つて置く。

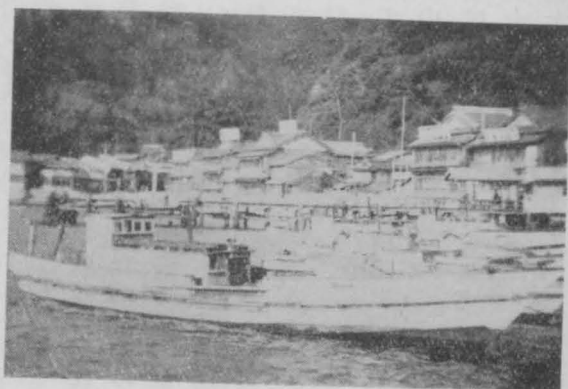
主聚落の美保關港は、半島の南岸にある小灣入たる美保灣に沿ふて、極めて僅かの平地に立地する密集聚落である。背後には二百米内外の山があつて、山脚は直ちに海に臨んでゐるので、聚落はたゞ一筋の街村的形態をとり、小さな谷の部分に僅かの枝を出してゐるに過ぎない。(第一圖)

従つてどの家も一方が街路に面し、他方が海か又は山に接してゐると云つてよい。小さい町に似合はず、二階建が非常に多いのも、こうした狭い土地だからであらう。一戸平均の宅地面積が五十六坪に過ぎないといふことも亦當然の

第一圖 美保關町大觀



第二圖 美保關埠頭



現象と云ひ得る。

町の構造

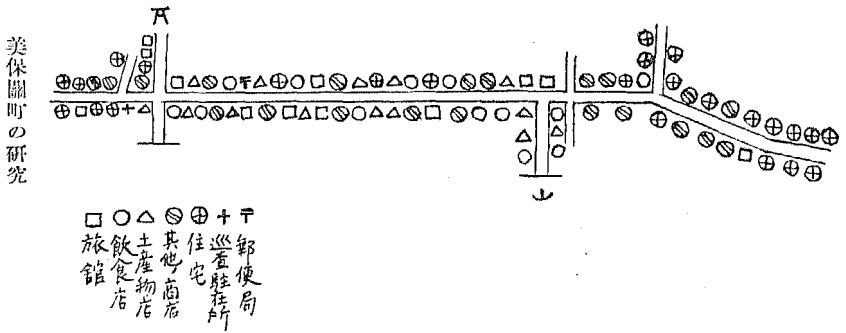
半圓形を描いてゐる灣の灣奥の部分は、町の中央にあたつてゐて、そこに埠頭が出来て居り、町の玄關となつてゐる。さゝやかな棧橋があつ

第三圖 門前町の景觀



て發動機船が一日十數回發着する。棧橋の上に立つて先づ驚くのは、軒を並べた堂々たる大旅館である。改札口を出ると、すぐに飲食店があつて客を呼んでゐるし、土産物店が派手に飾り出てゐる。

# 第四圖 美保關町中心部の構造



棧橋の東の方は漁船の集合する處、漁港たるの特徴が明瞭に見てとれる(第二圖)漁期には相當にごつた返すことであらう。

埠頭から神社までの間はほんの二百米ばかりに過ぎないが全く門前町の構造を有し、十二戸の飲食店、十戸の旅館、十

四戸の土産物店が並列し、その間に十戸の普通商店と四戸の住宅(第三圖・第四圖)とが交つてゐるのみである。

埠頭から東の方と、神社から西の方とは大體に於て住宅ばかりで、如何にも漁村らしい景觀を呈してゐる。

## 機能

帆船時代にあつては日本海に於ける一要津として極めて重要な役割をつとめた。鳥取縣にも島根縣にも、港らしい港は殆ど無いことであるし、隱岐へ渡るにもこゝが最も近い港であつた。随つて風待ちする船が常に輻湊し、その船員の無聊を慰めるためとあつて、艶かしい歌聲が常に靜かな港の波の上を漂つてゐたのである。

併しそれは昔の夢となつた。今の美保關の人たちは、一體何によつて生活してゐるであらうか暫く統計にたよつて判斷しよう。

職業別戸數を見ると、全戸數三六五の三分の一即ち一二三戸は水産業であつて、農業の七六

戸、商業の六〇戸がこれに次でゐる。生産から見ても水産物は八萬二千五百圓に上り、全生産高十五萬二千圓の半額以上に達してゐるし、その大部分は移出されて八萬二千二百圓の収入が得られ、食料品としての米を三萬四千圓、酒を四萬二千圓も買ふことが出来る勘定になつてゐる。

農業は七十六戸もあるが、田は僅かに三反しかないで、米の産額は殆ど問題にならない。これは地勢の關係上已むを得ないことである。その代り畑は一三七町もあつて、一戸平均一町八反にも及んでゐる。そして桑を栽培して養蠶をやつてゐるので、繭價の下落した昭和八年にも三萬六千五百圓の収入を得てゐる。従つて農産總額は五萬圓に近く、水産に次での重要な産業である。

工業と云へば竹細工やわかめ菓子が土地の名産となつてゐるが、ほんの土産物程度のものに過ぎない。併しそれでも二十四戸で一萬四千圓

を生産してゐる。牧畜や林業はこれを本業とするものが一戸も無いので、生産額も林産五千六百圓、畜産四百圓に過ぎない。

商業を本業とするもの六十戸、副業とするもの十戸で、それが何程の収入を舉げてゐるかは明瞭でないが、一ヶ年間の來遊客は定期船によるもの七五、五六七人で、自動車によるものを加へたら十萬に近いであらうし、その中六千七百人は宿泊してゐるから、これによる収入は相當大きなものであらう。假りに一人平均二圓を費消し、その二割が収益であるとすれば四萬圓となるのである。

### 參詣か遊覽か

さてこの十萬人の來遊客はどんな性質のものであるだらうか、參詣客とすればこの聚落は門前町(或は鳥居前町)と稱すべきであり、觀光客とすれば遊覽町と云はねばならぬ。どちらにしても町の形態や構造の上からは似よつたものであることは勿論であるし、又そう嚴密に區別す

る必要もないわけではあるが、一應検討して置きたいと思ふ。

こゝにある神社は美保神社と云つて、事代主命を祀つた國幣中社である。出雲大社を大黒様といふに對して、こゝを名びす様と稱し、「名びす大黒出雲の國の、西と東の守り神」といふ俗謠の通り相當に信仰のあつた神様ではあるが、參詣者は大抵近邊の人たちで、あまり遠方へはその名が聞えてゐない。

山陰線や伯備線の汽車の中で、多くの人から美保關のことを聞かれた、「大社ばかりは片詣りと云ひますが美保にも神社がありますか」とか「是非美保にも行けとすゝめられましたか」とかには何がありますか」などと云つてゐる。そしてその地に臨んではじめて神社のあることを知り、わけもわからぬで參詣するといふのが、少くない様に見受けられる。

お祭りは四月七日の青柴垣神事、十二月三日の諸手船神事とあつて、その時は數萬の參詣者

があるが、それは多くは縣内の人に限られてゐる。縣外からの來遊者は四月五月が最も多く、殊に宿泊者は四月に最多で十二月には最少となつてゐる。(第五圖)

神社よりも有名なのは關の五本松である。その風景がどうあらうとも、その傳説がどうあらうとも、それには敢て關係する所なく、たと

第五圖 美保關宿泊人員



謠によつて五本松の名は天下に高い。五本松公園の眺望が大天橋を脚下に横へ、出雲富士を背景として、天橋立以上、實に天下の絶景であるといふことは、行つてから後始めて知る位で、あまり名高いものにはなつてゐない。況や美保の北浦、日本海に面した海岸が出雲赤壁と云はれる絶景であることなどは、行つた人でも知らずに歸り、知つても見ないで歸るものが大多數である。

美保關町にとつては、十萬の參詣客と七千の宿泊客とどちらが果して恩恵が大であるか、それは俄かに斷言し得られないことであるが、宿泊客の大多數が必ずしも參詣を目的としてゐないといふことだけは確かである。無論宿泊客は縣外の人が大多數で、縣内の人は他縣人の三十分の一度に過ぎない。そして氣候のよい農閑期である四五月が最も多いのは、大社參りの客が序を以て立ち寄るといふのが真相であらう。町内には旅館が十一戸（分館を有するものが

あるので實際は十二戸）の外に料理店が十一戸（多くは飲食店を兼ねてゐる）あり、藝妓が五人、酌婦が七人居る。それも昔は數十人居たのが、次第に減つて現狀となつた。そしてこの地に限り藝妓を旅館に入れることを公認してある。聞けば宿泊して藝妓を呼ばないと、旅館の待遇が頗る冷かになるとか。傳統とは云へ妙な習慣ではある。

交通機關の發達した今日、米子や松江も程近いのだから、態々こゝに来て宿泊するほどの必要は先づ無い。必要なのは絃歌の聲にあこがれを持つ人たちのみである。遊覽參詣の客は年々多くなつても、宿泊客の年々減ることは、この町の人たちにとつて限りない哀愁を味はせつゝある。

### む す び

美保關は門前町でもあり、遊覽町でもあり、又一種變態的な港町でもある。漁港としての機能は最も著しいが、町の形態から云へば門前町



の匂ひが最も高い。併し神社にしても風景にしても、十萬の人を引きつけ七千の人を宿泊させるだけの魅力が果してあるだらうか。そこに帆船時代の港町の傳統の力を見のがすことは出来ぬ。と同時に、附近に大社があり、風景で名高

い松江があるといふことも大きい關係をもつてゐる。美保だけを目的の客は恐らく非常に少いことであらう。して見れば大社や松江と共に、一種の双児式若くは姉妹式門前町又は遊覧町と云ふべきであらう。(完)

## 江濃境上に於ける美濃の山村

—養老郡時村字時山に就いて

秋 山 桓 士

京都帝國大學の小牧助教の「姉川上流の村々」(本誌二二卷一號)、「近江カルストの村々」(同二三卷二號)を始め其他

ある。特記して好ヒントを與へられた小牧先生に感謝の意を表したい。

### 一

の山村に關する御勞作は豫てより美濃の山村の研究に興味を有する私に取つて此の上なき良き指針ともなり又強き刺激ともなつた。本小篇は本年四月の初小牧助教の近江カルストの村々のコースを遂に、美濃の時村から五倍越えして多賀に出た際の小さい收穫であつて、私の目下調査中に屬する「牧田川及び粕川上流の山村」と姉妹篇をなすもので

時山は揖斐川の支流牧田川の谷源に位する鈴鹿山脈東斜面の一間聚落である。標高七〇〇乃至八〇〇米の山地に圍繞された深いV字型の浸蝕谷の谷壁、即ち東流する溪谷の南北兩岸に